

多様で持続可能な対人援助に必要な「知」について

～The consideration on intelligence required for diverse and sustainable human services.～

企画・話題提供者：本間 毅（退院支援研究会）

討論者：村本邦子（立命館大学教授） 中村正（立命館大学教授）

司会：岡崎正明（広島市児童相談所） 谷田寿幸（TAN 学校教育相談所、
広島県スクールカウンセラー）

自身が被爆者である医師の肥田は、アメリカ合衆国により 1946 年に比治山の高台に開設された「ABCC(Atomic Bomb Casualty Commission 原爆被害調査委員会)」は、原爆の人体に及ぼす影響を調査する機関ではあったが、被爆者の治療にあたることはなかったと述べている。1945 年 8 月 6 日朝、賢者と呼ばれた専門家たちの英知を結集し製造された原爆が投下され、無辜の民の日常は奪われ、生き残ったものの人生を大きく変えた。G.バタイユはその様を、「突如おぞましきの中に突き落とされ、煙にあぶられた白蟻の巣」と表現し、恐怖によって相手を屈服させることの人間的な意味を明らかにした。戦後 80 年近く経ち、被爆者や家族の人数は減り記憶は薄らいでゆく。人類に対し、語り部の皆さんの果たす役割は極めて重要である。

我が国では、1990 年代から EBM(Evidence Based Medicine 根拠に基づく医療)の台頭に伴い、クライアント側にも医療の内容や手順を示す

「クリニカルパス」が用いられるようになった。また不安なく入退院を迎えられるよう、社会福祉士や退院支援看護師などの対人援助職が、相談業務を通じ、医療というクライアントにとってブラック・ボックスとも言える状況からの脱却を懸命に模索している。退院支援やチーム医療について話す機会が増えるにつれ、話す私の方が参加者からご自身や家族の病気や入退院に関する物語を聞かせてもらうことが多くなっているのも事実である。科学的なアプローチは、当初の目的を達成すればひとまず終結する。一方、クライアントの語りの背景にある悲惨な動物的体験や苦痛(必ずしも理由があるわけではない)は、無限に存在し終りはない。多様でアプローチの方法を定式化できないクライアントのニーズに、対人援助者がこれからも答え続けてゆくために求められる「知」について私見を述べる。